

## 7.大沢の「夏の大祭」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 那須, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/6961">http://hdl.handle.net/2297/6961</a>

## 7. 大沢の「夏の大祭」

那 須 雄 一

1. はじめに
2. 大沢の年中行事
3. 「夏の大祭」概要
4. 2006年度「夏の大祭」レポート
5. 考察
6. おわりに

### 1. はじめに

夏、奥能登では様々な農耕神事が各地で催される。それぞれに特色はあるが、そのほとんどが「キリコ」と呼ばれる直方体の形をした行灯を用いるという点では共通している。そのため、奥能登の夏祭りといえばキリコを思い浮かべる人が多いのではないだろうか。その中で、大沢の夏の大祭は奥能登でもキリコを用いない夏祭りということで、異彩を放っている。今回私は大沢を訪問して日々の暮らしを訪ねて回ったが、多くの人が年中行事の豊富さを教えてくれた。その中でも夏の大祭に対してはとりわけ精力的に活動しているのだと感じた。以下、第2節では大沢の年中行事及び祭りにまつわる伝説について述べ、第3節では夏の大祭の行程を概括する。つづく第4節・第5節では、2006年8月に私が実際に体験した大沢の夏の大祭を、詳しく述べて考察したいと思う。

### 2. 大沢の年中行事

西保地区の4地域の中で最も人口の多い大沢では、例祭が盛んに行われている。4月1日に行われ、「四月の一日祭」とも呼ばれる春祭り、8月17日・18日のお盆の時期に行われる夏の大祭、秋には2日間にわたって収穫を祝う秋祭り（9/20, 21）や、新嘗祭（11/23）、そして冬は大晦日から正月にかけて行われる大歳（おおとし）や小串祭り（2/6）など、多くの祭りが季節ごとに伝統的に行われてきた。その中でもとりわけ大沢に固有の特徴が見られるのが、「夏の大祭」である。

大沢には「夏の大祭」にまつわる伝説が伝えられている。西保公民館に所蔵されている西保地区の説話集『西保の民話と碑』によれば、「猿鬼伝説」の中に祭りの由来を見ることが出来る。その昔、一匹の凶悪な猿鬼が大沢に棲んでいた。年に一度、白羽の矢が立った家は猿鬼に娘をさし出すという

人身御供を人々は強いられていたという。人々は、その猿鬼を退治するべく、出雲大神を招請して大沢の守護神として祀ることにした。社殿を夏までに完成させ、静浦神社が建立した際、二昼夜にわたる大祭を催して出雲大神を招請し、祝った。この神が大奈牟智（おおなむち）＝大国主命（おおくにぬしのみこと）であり、静浦神社創建の大神で今の夏の大祭の由来であるとされている。また、2月の小串祭りも猿鬼伝説の人身御供の儀式に由来しており、娘ではなく、カンザシに見立てた小串と、娘の髪に見立てたモダワラ（海草）を捧げる風習が今に伝えられている。

#### <大沢の年中行事>

大晦日～正月	大年（新年祭）
2/6	小串祭り（六日どの祭り・皿たたき祭り）
4/1	春祭り（四月の一日祭り）
8/17・18	夏の大祭
9/20・21	秋祭り
11/23	新嘗祭

（筆者作成）

また、大沢の夏の大祭は以前、8月20日・21日に行われていたが、お盆の15・16日に続いて行われたほうが住民の都合がいいということで、2・3年前に現在の17日と18日に移された。それに対して大沢からやや西側にある上大沢では、昔から変わらず8月19日に夏祭りが行われている。大沢の夏の大祭と上大沢の夏祭りとの関連性について、上大沢の人々の間でしばしば耳にする話がある。上大沢の夏祭りは大沢の祭りとは異なり、祭りといっても神主が上大沢の日吉神社で祝詞を読み、20軒ある上大沢の人達がめいめいにお参りをするという小規模なものであるが、しばしば日吉神社は「姉神様」、大沢の静浦神社の神様は「妹神様」という表現がされている。そのため祭りは上大沢（日吉神社）が先に行い、大沢（静浦神社）がその後で行われていたのだという。現在では大沢の祭りの方が上大沢よりも先に行われるようになり、上大沢の人たちの中には、「ただの人間の都合で姉神様の祭りを後にしてしまつて汚<sup>けが</sup>れが来ないだろうか」、「何事も無<sup>な</sup>けりゃいいが」という声も出ている。しかしもう2・3年経つことだし、汚<sup>けが</sup>れはなかったのだろう、とも話していた。

これらの話については、日吉神社と静浦神社の両方を兼部社としている神主のTさん（男性・70代）からも詳細を伺っている。神主の仕事はもう50年程やっているそうで、本部社は門前の村上にある八幡神社であるが、氏子の戸数が少ないため、兼部社として13社の神主も務めている。その中に大沢の静浦神社と上大沢の日吉神社もあるのだという。

神主さんの話によれば、お祭りとは一般的に、その土地の人々が太陽や雨のめぐみといった自然から与えられるものに対して感謝したことが始まりだとされる。大沢でも同様で、人は海の見えるきれいな平地に集まり、酒を酌み交わしたのが夏の大祭の実際の起源で、そのうちにその場所が神聖なところだとされるようになり、それが後の社殿の場所となり、今の静浦神社が建立されたと考えられ、

猿鬼伝説と神社の起源については直接関わりはないということである。静浦神社の社名は、明治の初めにお宮を宗教法人として県に登録したときに、当時の大沢の有力者であった土地持ちの筒井家が命名したという説もあるが、筒井家を含めた氏子衆によって決められたのではないかと思われる。その名の由来はいろいろな人が様々なことを言っているが、西保（西方）の静かな浦、というところから来ているという説が通説である。

また、姉神様というのは昔の氏子衆の根拠のない言い伝えだと神主さんは話した。神社には大国主や八幡様、イザナギノミコトなどたくさんのお神様が奉られているけれども、「姉神様」という神様は存在しない。神主が祭りでお祓いをする際、大沢の方が二日間あって長いので、一日だけの上大沢の方を先に19日の午前に済ませてから大沢のほうに来ていた習慣があったことから、「神主様はいつも上大沢から先にやっている。先にやるから姉神様だ」と地元の人達の間で言われるようになったという。過去に上大沢の旧家から大沢の筒井家へ、山を一つ持たせた盛大な嫁入りがあったことから、山一つやれるくらい上大沢は立派であるという意識が、姉神様という言葉が生まれた理由と関係があるかもしれないと神主さんは語った。そのため、祭りの順序が逆になったからといって祟りがあるというわけではないという。

### 3. 夏の大祭概要

大沢の夏の大祭は、8月17日の東方宵祭りとして18日の西方本祭りの2日間にかけて行われる。この祭りの最大の特徴だと言えるのが、木製の2階建ての車に等身大の人形や色とりどりの吹流し、そして祭囃子を乗せて練る曳山（山車）と神輿である。神輿には神様が宿り、曳山は神様を引き立てる花の意味があるそうだ。曳山を曳くのは大沢の10代から30代の男性で構成される壮年団で、神輿を担ぐのは大沢の40代以上の男性の役目である。祭りの間、曳山は常に神輿の前を進み、大沢の町を東西に伸びる海沿いの道を賑やかに移動する。

輪島市外や県外に出ている大沢の人たちが、お盆の頃には帰ってくる。そうして集まった若い男たちが壮年団として祭りを取り仕切って伝統を守っている。この節では、まずこの祭りの中心的組織である壮年団について記述しながら、夏の大祭について述べていこうと思う。

#### 3-1 壮年団

大沢では高校生から35歳程度までの男子で構成される壮年団という組織が受け継がれてきた。壮年団の活動内容は主に祭りに関わる奉仕的活動であるが、大沢のすべての祭りに壮年団が関わるわけではなく、夏の大祭が壮年団の中心的な活動の場である。そのため、組織は団長、会計、書記のほか、酒、笛、太鼓、鐘といった祭りのための役割が分担される。また、入団の際、団員は団長の指示で「人形作り」か「奉燈づくり」に振り分けられる。祭りの準備で、昔は社の中に「下っ端」（主に次男以下）は入ることはできなかったという。社に入ることができるのは長男だけで、次男以下は外から見ること

としかできなかった。また、祭りの準備を当日休むと「出不足（デブソク）」といって罰金 1 万円、遅刻をすると罰金 5 千円が科せられる規則がある。早退に罰金はないが、近年では作業をする人数が少ないためすぐにばれるので、する人はいないという。壮年団の父親など、代わりの人が来る場合は、罰金は払わなくてよい。

大沢の男子は全員、中学校を卒業すると壮年団に入団することになっており、入団の際は、お酒とお重を用意して挨拶をする入団式が催される。昔は 70~80 人いた長男（跡取り）のみが入団することができたが、現在は若者が大沢の外へ出ていってしまい壮年団の人数が減り、祭りに支障をきたすため、すべての男子が壮年団に入団する。また本来は壮年団の年齢は 35 歳までとされているが、祭りのときだけは上限を上げ、40 代までとしている。それでも現在の正式な壮年団員は 15 人しかいない。そのうち幽霊団員が 2 名いるため実質は 13 人で、そして 2006 年の祭りの準備に来たのは 6 人というのが現状である。15 人のうち 6 人が学生で、名古屋市と金沢市在住の団員が 1 人ずついる以外は輪島市街で職についている人がほとんどで、大沢から通っている。

壮年団は共有林を持っており、共有林の木は、曳山や施設の補修の際に使われる。壮年団を退団する際には共有林の下草を刈り、枝を落とす。退団式は神社で行われる。そして壮年団を卒業すると、曳山引きから神輿を担ぐ側になる。しかし壮年団を卒業してすぐに神輿を担ぐようになるわけではない。人が足りないので卒業してから後も曳山を曳くことは暗黙の了解となっており、神輿を担ぐようになるのは 40 代半ばあたりからのことになる。壮年団を退団した男性は「年寄衆」という表現が一般的のようである。もし 35 歳で退団した人に曳山を曳いてもらう場合は、壮年団の団員自らが家々を訪ねて願います。これに対して神輿の担ぎ手の募集については地域の回覧板で回るので、壮年団がお願いに行くのが先か、回覧板が回るのが先かで 40 歳前後の人が曳山に行くか神輿に行くかが決まる。

神輿の担ぎ手は、大沢町の 10 班（組）に分けられた班の中から、各班から 3 人ずつ、計 30 人で担ぐ。神輿を担ぐのは男性だが、年齢制限等はなく 20 代もいれば 50 代・60 代もいる。

### 3-2 祭りの準備

祭りの大きな準備は、曳山と御飯屋（オカリヤ）を組み立てることである。御飯屋とは、二日間にわたって行われる夏の大祭の間、神様の宿った神輿が宵祭りの晩に夜を明かす仮のお宮である。曳山の本組みを組み立てるのは壮年団の仕事で、御飯屋・旗・幟・紙鳥居を作るのが壮年団を除く町の男たちの仕事である。普段は両方とも分解されて境内の倉庫にしまわれており、17 日の宵祭り当日の朝にそれぞれ組み立てられるが、曳山に乗せる人形や御飯屋の前に並べる奉燈は、祭り本番の一週間前に静浦神社で壮年団によって作られる。

曳山には、わらで作った等身大の人形を 2 体乗せる。人形のモチーフは特に決まっていないが、忠臣蔵や義経など、毎年題材が変わる。昔は毎年決められたその年のテーマがあったそうだが、それを教えてくれる人が亡くなったため、テーマの資料がどこにあるのか分からないのだという。昔から歌

舞伎の話であり、その一節を人形の格好にする。必ず男女の物語となっており、男女一組の人形は題材によって人形のポーズや持ち物（刀など）が変わる。前年刈り取ったわらを束ね、男の胴・首・足2本・腕2本、女の胴・首・足2本・腕二本、合計12本のわら束を作る。腕・首・足を一番太くした胴のわら束に埋め込み、首にマネキンの頭をつける。着物も男女一組ずつあり、足には足袋を履かせる。組みあがったら、胴の下に曳山の杭を刺して固定する。人形はその年の物語によって若干手足の角度を変え、持ち物も変わる。曳山を見る人が分かるように曳山の端に今年のテーマを書いた紙を貼るが、それほどテーマにこだわっている様子はない。人によっては毎年の人形のテーマをよく覚えており、前年と同一のテーマだったりすると苦情が来ることもあった。

ここ2年程は作る人が不足し、市販のマネキンを使っていたが、2006年度は輪島市の保存会の撮影ということもあり、昔のようにわらで人形を作ることになったのだという。例年は中学校の体育館を借りて作っていたが、2006年の夏は中学校に卓球台を設置しているため、静浦神社の境内で作った。

祭りの準備として、女性は「サルコ」という猿の人形をつくる。サルコは曳山と、仮設置された神社「御仮屋（おかりや）」の鳥居の幟につけられる。一番新しいサルコは一昨年に奉納されたものである。珍しいとあって観光客が取って行ってしまって少なくなったので、婦人会で3・4年前に作ったのだという。死者供養のためのもので、一枚の布の四隅を折り、綿を包み込んで縫い合わせ、頭と帯をつけたものである。形は飛騨のサルボボに似ている。

曳山には猿子人形のほか、人名が書かれた「吹流し」という木綿の布や大きな赤い傘、紙でできた造花、船の名前が書かれた紙などがつけられる。子供が産まれたり、新しく嫁が来たりしたとき、その人の名前が吹流しに書かれ、奉納される。厄年のときに奉納する人もいるそうだ。昔、女性は祭りに参加することができなかつたため、この吹流しに名前を書くことで参加していた。船の名前が書かれた紙が曳山両脇に貼られているが、これは祭りのために壮年団に寄付をした人の漁船の名前らしい。

海辺にある、現在は駐車場になっている場所に、壮年団を除く村の男たち50人ほどが総出で御仮屋を建てる。御仮屋、鳥居、神輿の飾り付けなど、朝6時に集まって7時くらいには終る。御仮屋の広さは大体、間口二間、奥行き三間で、その中で神輿が休む。御仮屋の前には仮の紙鳥居が立てられ、御仮屋の鴨居には「御神燈」と書かれた奉燈が吊るされる。御仮屋は昔は板でできていたが、現在は大阪のテント屋に注文した特注のテントで、屋根のシートと壁となるシートが2枚でできており、大変重く頑丈なものが使われている。また、紙鳥居についても今はビニール製である。昔は奉燈と同じように紙で作っていたが、今はばらして毎年使っている。

奉燈は、毎年お盆の前の日曜に壮年団が集まって社の中で作る。昔は大勢いたが、今では数人しかいなくなってしまった。お宮の外では、紙で花を作ったり、奉燈に色をつけたりという作業をしている。奉燈には二種類あり、長さ2mほどの大きいものと、小さいものがある。大きいほうの奉燈の表側には「御神燈」、裏側には「立ち帰り 辺津の入江に舟とめて いくたびも見む 能登の嶋山 西行法師」と書かれているが、書かれている内容について深くはわからないのだという。大きな奉燈は御仮屋の鴨居につけられ、小さな奉燈は鳥居と御仮屋の間に吊るされる。大きな奉燈の中には電球を、小

さな奉燈の中にはろうそくを入れる。火をともすのは壮年団の若い者の仕事である。

### 3-3 祭りの日程概要

宵祭り当日の午前中に神社の前で組み立てられた曳山は、午後16時ごろになると曳山が静浦神社の境内を出発し、神社正面の路地を海側へと進む。海沿いの道路へ出た曳山は、神社正面の道を境に東側の向出方面の一本道を数回往復する。逆に18日の本祭りでは西側の中島、西出方面の一本道を往復する。神輿は、拝殿での神渡しが終わると境内を出発し、曳山の通った道とは別のルートで海沿いの道へと出る。神輿の通り道には一定間隔で清めの塩がまかれ、その上を神輿は進んでゆく。そして入り江の橋の所で曳山と合流し、以降曳山の後方について移動する。海沿いの道路で、壮年団の引く曳山の後方を年寄衆の担ぐ神輿が移動し、ぶつかり合いながら3往復から5往復する。

曳山は二階建て構造になっており、一畳ほどのスペースの一階部分には笛や太鼓などを演奏する囃子が乗り込む。毎年だいたい、笛2人、太鼓3人、「シュンギリ」という鐘1人で、4人から6人の壮年団員が担当する。一番難しいといわれる笛を吹ける人が、壮年団の中には誰もいなくなってしまった。昔は若い人間を集めて笛の練習をしていたが今はしていないのだという。楽器は神社に保管されている。

二階には人形、提灯のついた赤い大傘、竹などが取り付けられ、子供が乗れるようになっている。毎年15人ほどの子どもたちが交代で3・4人くらいずつ乗っている。保育所の子どもが中心で、二階部分に上がった壮年団員が下から子どもを上へ引き上げて乗せる。

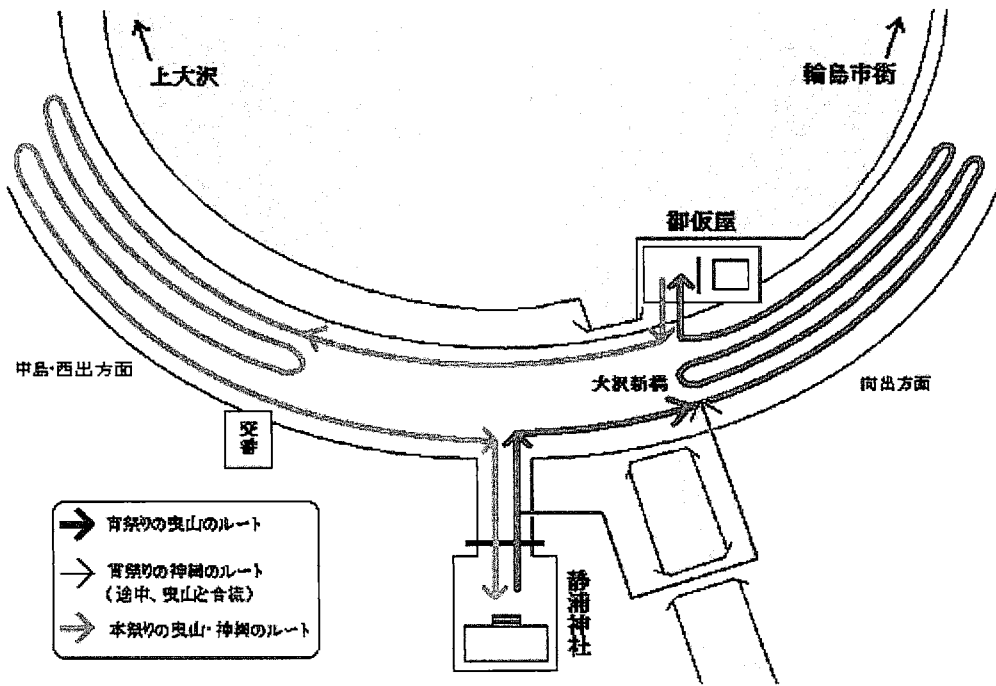
#### <2006年度 静浦神社夏祭りの日程>

8/6 (日)	8:00～	総会・奉燈はり、人形作り (静浦神社)
8/16 (水)		お宮の掃除 大橋のところに神輿を置くための場所を設営
8/17 (木)	6:00～	山車組み立て (静浦神社)、奉燈たて (御仮屋前)
	13:00～	俵づくり (御仮屋前) 船寄付集め
	15:30～	神事
8/18 (金)	7:00～	土俵作り (御仮屋前) 相撲寄付集め
	15:30～	神事
	19:30～	相撲大会 (御仮屋前)
8/19 (土)		後片付け

\*相撲大会は、雨天時は翌日の早朝に延期。翌日も雨の場合は中止となる。

(筆者作成)

<曳山・神輿の通るルート>



(筆者作成)

午後6時頃、神輿が御飯屋の中に入り、曳山は御飯屋の鳥居の前に飾られる。そして人々はそれぞれの家に帰って晩御飯を食べた後、午後7時頃に再び御飯屋に集まる。昔は夜が明けるまで婦人会中心の「チョンガリ（知恩狩）節」という踊りを鈴木問答の歌に合わせて踊っていたが、終戦の時期から昭和30（1955）年までの間に行われなくなった。現在は御飯屋の前に機械を据えて、カラオケ大会が開かれている。その間、御飯屋のほうでは宮番が寝ずの番をする。宮番とは、お祭りの際に御飯屋の中で徹夜で番をする世話役である。

次の日の西方本祭りも午後から行われる。午後四時頃に神輿は御飯屋を出て、曳山は西側へ。宵祭りと同様、海沿いの道を往復する。最後は静浦神社の中に神輿が入り、その後曳山を境内に入れる。

各家庭で食事をした後、午後7時頃から始まる子供相撲を見るため、人々は再度御飯屋の前に集合する。昔は曳山が社に入った後相撲が始まる前に、その年に村に嫁いだ女性は高島田を結って結婚式の格好で神社にお参りをするという習慣があった。これはゲンゾウ参りと呼ばれ、戦前と戦後にしばらくの間行われていた。お酒、お米、魚、卵、昆布、塩、果物の七品を拝殿の上の台に備えた。花嫁姿の女性の着物を見に来る人もいた。

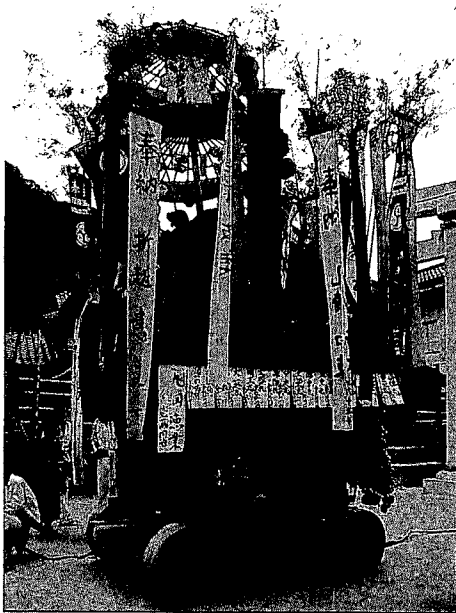


写真1：曳山

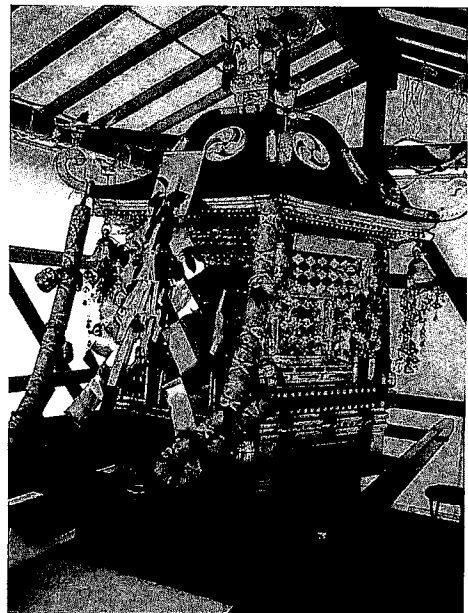


写真2：神輿

相撲は20~25年ほど前までは門前や輪島のほうから力士が集まって来たが、今相撲をするのは子供だけである。五人抜きと十人抜きがあり、勝敗が決まるとすぐに次の相手が飛びついてくるので、怪我が多かったという。土俵は本祭りの日の朝に壮年団が集まって御飯屋の前に設営する。

#### 4. 2006年度「夏の大祭」レポート

##### 4-1 宵祭り

8月17日、私が静浦神社に到着したのは午後3時頃だった。天気はあいにくの曇り空である。壮年団が朝6時に集合して組み立てたという曳山はまだ鳥居の内側にあった。境内には壮年団の方々が集まっており、曳山を境内から鳥居をくぐらせて外へ出るところだった。祭りの出店は2軒だけで、話によれば門前から昔から来ているのだという。神輿はまだ倉庫の中だった。一週間前にはほとんど見なかった子供達もたくさん来ていた。

早朝5時に組み立てたという曳山の上部に固定されている吹き流しと人形をいったん外し、傘を傾けて鳥居をくぐる。鳥居を出てすぐに電線の下を通すため、長い竹を使って電線を持ち上げる。曳山が鳥居の外へ出ると、ほどなくして黒い法被を着た女性達が境内に太鼓を並べ、叩き始めた。彼女たちは「西保荒波太鼓」という西保婦人会の集まりで、2・3年前に輪島全体で英語を教えていた先生が、太鼓が非常に上手で、婦人会のお母さん達に太鼓を教えたのが始まりだそうだ。2005年の1月、新年

会で寄付を募り、新しい太鼓を購入したことをきっかけに発足した。以来、西保の中で祭りがあるときには出向いて太鼓を叩いているという。昨年に初めて夏の大祭で太鼓を叩き、今回は2度目になる。1曲目は婦人会の方が8人くらいで叩き、2曲目は中学生くらいの男の子2人と女の子が3人くらいで舞いながら太鼓を叩いていた。ばちの動きが派手で、場が華やかになった。来ていた人達もじっと太鼓に聞き入っていた。



写真3：西保荒波太鼓の様子

西保荒波太鼓の演奏が終わる頃、雨と雷が強くなってきた。神輿と山車の人形にはビニールがかぶせられ、祭りは始まる。壮年団が、鳥居をくぐった曳山を神社に向かうように180度方向を変えると、曳山の前に酒や塩といったものが供えられ、壮年団のさした傘の下に神主さんが座った。周囲には壮年団が座っている。出社式が始まる。神主さんが太鼓を叩き、祝詞を唱える。最後にお神酒を山車の車輪に少しかけた。酒を振りかけたのは一種の清めで、神様にもお酒を少しいただいてもらう意味がある。お祓いを頼んだ壮年団員達も一緒に祈っている。曳山など、神様に近いものは先にお祓いをしておくものだそうだ。

祝詞が終ると、お神酒を壮年団の人達が回し飲む。瓶から直接飲んでた。なんでも、曳山が出る前に皆で酒3升とビール適量を空けるのだそうだ。祭りの途中でもう一度酒5升とビール適量を飲む。酒が足りないと祭りの途中で冷め、多いとはしゃぎすぎてしまうので、加減が大事なのだという。曳山を引く若い衆は酒を飲むのに対して神輿を担ぐ年寄衆は飲むことができない。その間も雨はやまず、午後4時10分、雨の中を山車は動き出す。お囃子が響き渡り、かけ声の調子を取るために男性が一人、マイクを持って歌を歌う。お囃子は曳山の下の部分にいるようだが、幕がかかっている中様子はわからない。様子をうかがうと、今年は中に5人いるようだった。壮年団全体の人数も、ざっと30人はいるように見えた。2006年度夏の大祭を取り仕切る壮年団員は15名、そして退団した人にも16人ほどにお願いし、曳山は30人くらいで曳く。お囃子の役は、5人中1人が現役で、4人は退団して

いる人に頼んだそうだ。壮年団の衣装は、上はYシャツ、下は白のトレーニングパンツで、地下足袋を履いている。正式には白足袋にわらじを履き、「巻きガワン」と呼ばれるゲートルを巻くのだそうだが、わらじを履いている人は少数だった。これらの衣装は全て各家庭にあるものである。それに対して神輿を担ぐ人は、青い法被に黒と白のはちまきをする。

曳山の赤い引き紐を20人ほどが「よーやっさ」というかけ声で一斉に引く。マイクで音頭をとっているのはNさん（男性・50代）である。通常は2人でやるものだという。雨のせいなのか、まだ声は小さく、威勢がいいとはいえない。宮を出て突き当たりを右へ曲がり、海に面した道へ。神社の東側を流れる川にかかる橋の近く、普段は駐車場となっている場所に、御仮屋が建てられている。御仮屋の幟は橋と電柱、船泊めの紐に、固定のために紐でくくりつけられ、紙鳥居は足の部分に大きな木の重石があり、のぼりにくくりつけてあった。

曳山は橋を越え、御仮屋の前あたりで一度止まって、子供達を曳山の上の部分に乗せる。怖がってすぐに降りてしまう子供もいた。子供を乗せた曳山はゆっくりと東側の斜面に続く道を登っていく。橋がない頃は川を渡らなければならなかったので大変だったそうだ。途中、御立寄（おたちより）の家の中へ入る様子が見えた。御立寄とは、祭りの最中に神輿が立ち寄って休む場所のことである。御立寄を準備する家は昔から決められており、のれんをかけ、米、塩、酒、輪島塗の器を並べておく。そして神輿と一緒に歩く神主さんに家族のお祓いをしてもらうのだという。お祓いは班ごとに行われ、各班が共同で神主さんを招待する。通常は神主さんがおつとめをするけれども、雨のときは中止になるそうだ。今回、御立寄は雨のためビニールをくくりつけて雨よけをしてあったが、雨で神主さんは神輿とは回らず、御立寄は無しになった。（後から聞いた話では、御仮屋の中で合同で行ったらしい）。また、曳山が来た時には「ヤー！」という声で人足衆が引き紐を玄関の中まで入れ、引き紐を上下に揺らす。そして家から水やお酒をあげるといふ掛け合いが行われる。

一方、神輿は神社を出ると突き当たりの道までは行かず、出たすぐ右の道に行く。神輿を担ぐ側の人達のことを「神輿かき」といい、神輿かきは大沢に10班あるうち、各班から3人ずつ出してもらう。つまり神輿かきは、旗を持つ人10人ほどと榊や賽銭箱持ち、神輿を置く台を持つ人ら5人ほど、神輿をかつぐ人が15人ほどで、全部で30人で構成される。神輿かきに対して、曳山を引く者は「ヤマ引き」という。神輿が通る道は1メートル間隔で盛り塩がしてある。小学校の前を通り、川に沿って海沿いの橋のところまで来たところで山車と合流する。話によると、紐の先をもっていけば重くない曳山に比べ、神輿はずっと担いでいないといけないので大変だという話である。この神輿は今年の春祭りを済ませてから修理に出し、8月12日に七尾から帰って来たばかりで、金箔に悪い水気や風を防ぐため、神輿にもビニールがかぶせられた。

途中で雨が上がり、曳山が一往復したところで神輿と合流し、もう2往復した後で仮小屋へ向かい、神輿と戦う。神輿と曳山が接触した状態は「馬」と呼ばれる。雨が止んだからなのか酒が回ったからなのか、壮年団の曳山は活気を増してゆく。「馬」は東側の急な斜面を「よーやっさ！」という威勢のよい掛け声で往復する。曳山の速度の調節は「歯止め持ち」の役目である。「歯止め」とは、山車

のスピードを緩めるために車輪にかませるものである。2人が歯止め持ちとして曳山の前と後ろを押さえる。走る曳山の車輪に差し込むので、一番危険な仕事である。先に後ろの歯止めで下積みしてから危険な前の歯止めに担当する。また、舵を取る「ねとり」という役割の人もある。これも2人で行う。

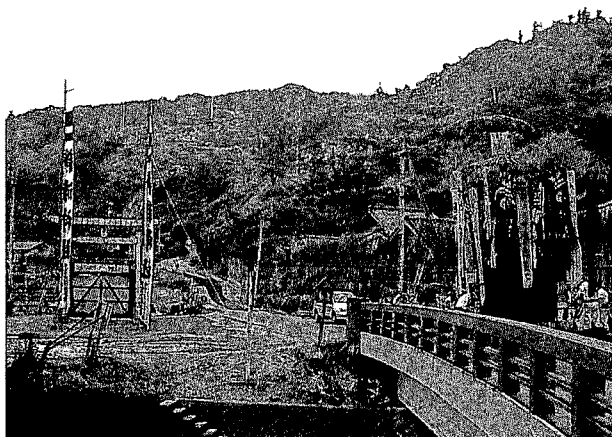


写真4：御仮屋と曳山

乗せた子どもが少なかったからか、山車は坂をかなり上まで上がった。午後5時半、曳山と神輿はおごり（ぶつかり）ながら3度東側を往復すると、御仮屋の方へ向かっていった。神輿を担ぐ年寄衆は「今年は神輿を新しくしたばかりだからあんまりワーっとやらんぞ」と言いながら、結局は御仮屋の前で3回おごって（ぶつかって）から神輿は御仮屋に納められ、鳥居の前に曳山が設置された。曳山には団長がお神酒を飾り、皆でお神酒をいただく。宵祭りのあと御神輿が御仮屋に入っすぐにおこなわれる儀式は「仮屋の着座式」という。そして午後9時ごろにもう一度御仮屋でおつとめをするが、それは「夕づとめ」といい、宮総代の人達とともに神様をもてなす儀式を行う。

例年は午後7時頃から学校でカラオケ大会が行われていたそうだが、カラオケの機械を買い替えるのにお金がかかるので、今年中止になった。昭和34-35（1959~1960）年頃まではカラオケではなく、静浦神社の境内で太鼓をたたき、盛大な盆踊りが行われていたそう。浜のほうまで出店が並び、呼ばなくても出店がいっぱい来て「邪魔だ」と追い返したほどだったという。人が集まらなくなったので今はやっていないのが残念である。

#### 4-2 本祭り

次の日私は、午前8時15分頃に御仮屋の前に到着した。前日の雨とは打って変わって日差しが強い。御仮屋の前ではすでに、夜に行われる子供相撲の土俵作りが壮年団員によって行われていた。午前7時くらいから始めていたらしい。4トントラック1台分の砂を運んできて、竹箒とスコップでならしていた。土俵の勝負俵は土嚢を縄で縛ったものを直径2メートル半程度に円形に並べたものであ

る。

港に泊まっている船は皆、長い竹に旗をたなびかせている。この竹の竿は壮年団が切ってきたもので、それと交換に山車に寄付してもらおうそうだ（5千円程度）。寄付をしてくれた船の名を紙に書いて山車に貼付ける。大沢では、祭りの日には基本的に漁には出ない。漁に出て何かあったら祭りどころではなくなるからという理由らしい。竿先にたなびく旗は、各家庭が持っているもので、祝い事の時に他からいただいたもののだそうである。大沢では祝い事の時には旗とお神酒を贈る習慣がある。

土俵作りは午前9時ごろで終了し、私は静浦神社へ向かった。神社には宮番のMさん（男性・60代）がいた。夕べ、Mさんは神主さんの接待をしていたらしい。神輿を担いだ年寄衆がお宮の中で宴会をしていたのだという。拝殿の中には普段敷かれていない畳が敷かれ、汗やこぼした酒で畳をよごさないためにその上にはござが敷かれていた。Mさんはそのござを干しているところだった。飲み会自体は午後9時頃までで終了し、神主さんは午後10時頃、一度輪島の自宅に戻ったそうである。

静浦神社の社殿の大きさは輪島全体で3本指に入る。Mさんに、倉庫の中にしまわれている兜と鎧を見せていただくことができた。これらは昔、義経をテーマにして曳山人形を作ったときのもので、かなりさびて傷んでいた。昨日は人形にビニールがかかかっていてわからなかったが、今年のテーマは忠臣蔵第5段である。他にも、木刀、昔使っていた人形の頭、獅子舞の頭などを見せていただいた。大沢の古地図や、日本刀も保管してあるらしい。

Mさんはここ5・6年宮番を務めてきた。午前0時までは「夕ごもり」といって宮総代（＝氏子の代表。宮の世話をする人）6人が御飯屋に集まってお下がり（お酒）を飲んでいて、M氏も宮総代の一人である。午前0時以降は他の5人は帰り、宮番のMさんは酒を飲んで寝たのだという。昔は御飯屋の前では相撲をやっていたりしてたくさんの方が周りにいたけれども、今では夜は宮番一人になる。安全のため、奉燈にろうそくの火は灯さなかった。熟睡はできないそうだ。

午前11時ごろに御飯屋の方へ戻ると、御飯屋の中で50代～60代の男性が6人ほど集まってお神酒を飲んでいて、中で私もお神酒を三三九度で頂戴して、昔の曳山についての話や世間話を聞いているうちに正午を回り、男性たちはお昼ご飯を食べに自宅へ戻っていった。

午後1時過ぎ、壮年団の人が集合場所に使っているという公民館を訪れた。中はフローリングに長机がコの字型に並べられており、壮年団の会計を担当しているという人と、もう1人壮年団を2年ほど前に卒業したという人がいた。他の人はちょうど昼ご飯を食べに自宅に戻ったところだという。前日は山車を引いた人達が公民館に集まり、飲み会があったらしい。

訪れたときにはちょうど会計の計算をしているところだった。祭りを通して何が一番お金がかかっているかを聞いたところ、一番は、怪我をしたときのための保険代だが、過去に事故があったわけではない。その他はカラオケのリース代、酒やまかない代、景品代など。これらはだいたい50万円ほどになる。今年は西保荒波太鼓の演奏があるため、夜のライトを借りたお金がかかったという。

この後壮年団は午後3時半まで、神輿の電気のバッテリーの調整、幕、スピーカーを直すといった準備作業を行う。話の途中で数名の壮年団員が帰って来て、準備作業が始まる気配がしたので、午後

2時半ごろに公民館を後にした。御仮屋の方に神主さんが来ているかもしれないということで、向かう途中でDさん(女性・60代)のお宅の前を通りかかると、Dさんが庭先に出ていたので声をかけた。ちょうどNさん(女性・40代)も通りかかったので少し話しをした。なんでも前日の宵祭りについての記事が、18日の北國新聞の朝刊で掲載されていたらしく、記事を見せていただいた。

2人と別れてお御仮屋へ行くと、壮年団の方達がすでに曳山の周りで作業していた。そこでMさんに神主さんが田中屋旅館に居るということをご報告され、田中屋旅館へ向かった。旅館に着いたのは午後2時半頃。中では輪島市の取材の方が神主さんにインタビューを終えたところだった。そこで、入れ違いに話を聞くことにした。

50年間神主を務めてこられて、何か変わりましたかと聞いたところ、人間は物事を略する、昔から伝わってきたものを簡素化する傾向があると神主さんは話した。「たとえば昔は祭りがあれば婦人会がご馳走を作ってお祝いをしたものだが、今は金がかかるからといって簡素化する。昔の伝統行事を守る事が他の色々なことを守ることにつながるのに。」

他にも静浦神社の起源、それぞれの儀式などについて話をし、しばらくすると祭りの時間が近づいた。午後3時30分。外に出ると、曳山はすでに少し移動していた。引き紐を円く輪にし、その中に酒の瓶が3本。団長が手を合わせ、そして酒を回していく。音頭をとるNさんがいたので話しかけた。

この音頭取りは「気やり」という。その名の通り気合いを入れるためである。年長の人から習い、何種類もあるものを暗記してしまったのだという。若い衆が声を合わせれば声も自然に出る。2・3日は声が出なくなることもあるそうだ。

御仮屋では、神主さんと宮総代の方々が座り、神輿が御仮屋を出る「お立ち」という儀式が行われていた。神主さんが太鼓を叩いて祝詞を読んだ後、三三九度でお酒を飲む。

お供えは必ず9種類で、輪島塗の三方の上に魚・海草・鶏(卵)・果物・お神酒・米・塩・水・餅米を供える。供え物の数は必ず奇数にする。祭りを終えてお宮に入るときには5種類にする。

儀式が終了と御仮屋の中の畳を立て、中の道具などを運び出しつつ神輿を外へ出す。その頃曳山はすでに西出方面の端まで進んでおり、神輿も塩の盛られた海辺の道を追う。途中、少し別の道に入ると、頼まれた班のお祓いをする。そして神輿が曳山のところまで来るとそこでもう一度お祓いがある。その途中で曳山は坂を下り始める。Hさん(男性・70代)の話によると、岬の端まで来るのは最初だけで、あとは交番のところまでの道を二度移動するらしい。交番のところ、神輿と曳山が接触する

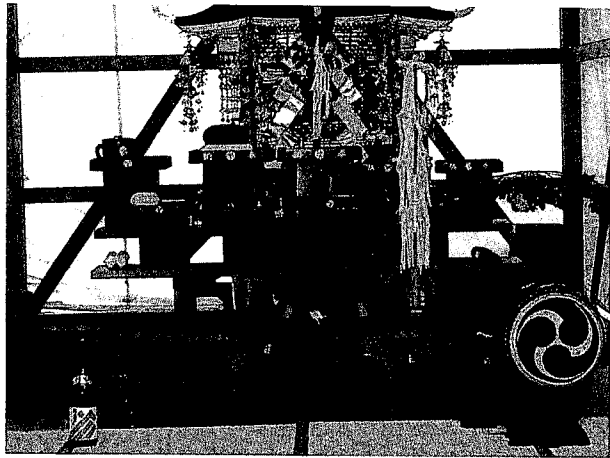


写真5：御仮屋内・9種類のお供え

「馬」の状態でも移動していく。神輿が離れてはぶつかり、押し合いへし合いが続く。神輿、曳山ともに休んでは進み、休んでは進む。宵祭りの倍以上の子供達が集まり、曳山の上に乗っていた。見物客も若い人が増え、浴衣姿の女性やベビーカーを押す女性の姿も見られた。

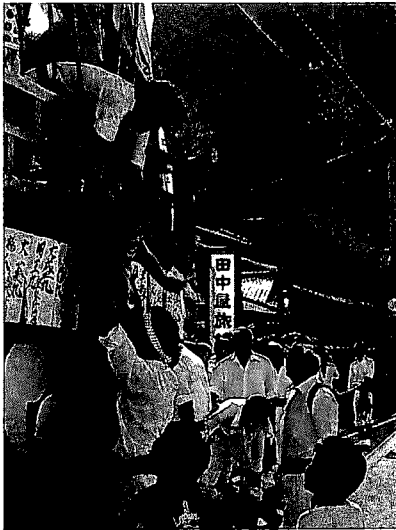


写真6：子供を曳山に乗せる

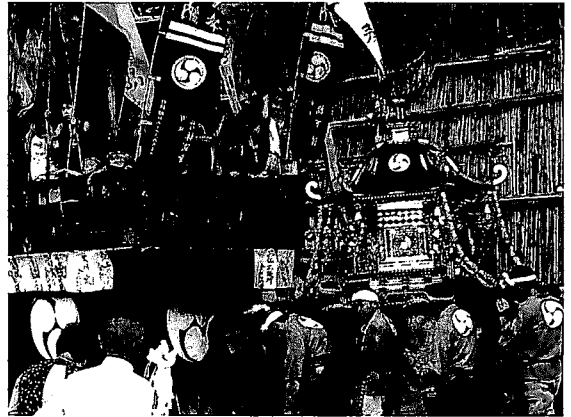


写真7：おごり合う曳山と神輿

そのうちに日は傾き始め、曳山にはちょうちんが次々と、曳山と神輿は徐々に神社の境内へと向かう。時刻は午後6時過ぎ。出てきたときと同様に電線を竹の竿で上げ、人形や吹き流しをいったん外し、傘を傾けて鳥居をくぐった。鳥居をくぐるまでに神社の前の道を3回ほど往復した。神輿もそれに続き、境内で神輿と曳山がおごりあった。3回おごると、曳山は正面の階段の向かって右手に停まった。神輿はそのまま移動を続け、階段の前まで来ては神輿を腰まで落とし、その状態で鳥居の前まで移動し、かけ声とともに神輿を肩に担いで階段の前まで何か低い声で歌を唱えながら歩く。それを3回ほど繰り返した後、拝殿に向かう階段をのぼる。拝殿の中ではすでに神主さんが待ち、その前で神輿は停まる。そこで「神渡し」の儀式が始まる。お宮に神輿を入れる儀式を「入り社」という。柵と賽銭箱が神輿に置かれ、神の宿った柵を拝殿の中へ引き入れる。話によると、このとき神輿が軽くなるという。そして儀式が終ると神輿は倉庫の中へ入れられ、壮年団も観客も三々五々帰っていく。午後6時45分。

御飯屋の前に行ってみると、先ほどまで神社の前にはいた人達が集まっており、西保荒波太鼓の人達が準備しているところだった。その中で、土俵脇にある景品台のところに壮年団の人達が相撲の取組みを相談しているようだった。そして壮年団の1人は、お年寄りや子供達に数字の書かれた紙を渡して回っていた。もしかすると相撲に出る人に配られる紙で、一瞬おじいちゃんも相撲に出るのかと思ったが、そうではないらしい。

壮年団による西保荒波太鼓の紹介のあと、午後7時から西保荒波太鼓の太鼓が始まった。御仮屋の前ではライトが設置され、子供達と町の人達が集まっていた。最初に一つの太鼓を使った演目があり、次に婦人会の皆さんの太鼓、そして最後に子供達の太鼓だった。日は暮れ、人々のざわめきの中で太鼓の激しい音色が響いた。



写真8：子供相撲の様子

午後7時30分、子供相撲が始まる。順番に「小学生未満」「小学1・2年生」「小学3・4年生」「小学5・6年生」別に行われた。勝ち抜きではなく、勝っても負けても景品がもらえるが、勝った方がいいものももらえるということだ。男は男、女は女で勝負できるようになっており、景品はぬいぐるみやプラモデルといった子供向けの玩具だった。昔は大沢の相撲といえば門前や輪島から挑戦者が来るほどで、大沢からは比較的有名な力士も出ていたという。今は人が集まらず子供相撲だけで、女の子も出ることができる。相撲は午後8時前には終わってしまい、終るとくじびき大会が始まった。先ほどくばっていた紙はこのためのものだったようだ。景品はワリバシやお茶、サランラップやほうきといった日用品だった。

こうして2006年度夏の大祭は終了し、私は大沢を後にした。

## 5. 考察

夏の大祭について大沢の人々から話を伺うと、ときに愚痴めいた話になることがあった。「曳山につける提灯も昔は紙で作っていたが、今はビニール製だ。昔は花やら短冊やらが傘からたくさん下がっていたが、今はそれらをすべてとってしまった。高さも電線にひっかかってしまうため、どんどん小さくなってしまった」、「昔は西保の人が総出で大沢の祭りに来たが、今は昔のにぎやかさの半分も無い」、「昔は祭りくらいが娯楽であったのでたくさんの人が見に出てきたものだが、昭和50年に

バスが開通し、外へ娯楽を求めて出て行った」などといった嘆息の聲が多々見られた。私は 2006 年より前の夏の大祭を見てはいないが、現在の夏の大祭には見られない行事が多数行われていたことを聞くと、昔の夏祭りはきつと凄まじく盛大だったに違いないと思う。今よりさらに華やかな飾りに乗せた曳山。たくさんの子どもたちと見物客。80 人近くの壮年団。獅子舞が舞い、屋台が浜辺から境内までひしめき合い、島田を結った美しい花嫁が、しゃなりと歩く。境内ではチョンガリ節の音色が響き渡り、人々は一晩中盆踊りに興じていた。相撲には能登全域から強い力士が集い、競い合った。そんな過去の夏の大祭のことを大沢の人たちは話して聞かせてくれた。その様子は得意げで、しかしどこか寂しそうでもあった。

伝統を維持してゆくことはなんと難しいことだろう。チョンガリ節を歌う人がいなくなって盆踊りはカラオケ大会に変わり、力士が集まらなくなった相撲は子ども相撲とくじ引き大会へと変えられた。人手の不足や予算の不足という現実を目の前にして、それでも祭りを活性化させようとする人々の姿が大沢にはあった。いくら大沢に住む人間が減っても、「毎年夏祭りには出稼ぎの人間も帰ってくる」と大沢の人々は口をそろえて話す。やはり大沢の人間の居場所は大沢なのだという強い思いを、大沢に残る人々も、出て行った人々も持っているように思う。このような帰属意識を再確認できるのが、夏の大祭なのだ。伝統だから守らねばならないとか、祭りの責任を果たさねばならないといった理由で祭りをしているのではない。懐かしい顔と再び出会い、心の知れた仲間と団結して協力し合うこと自体が何より楽しいのに違いない。私はこの大沢の夏の大祭を通して、故郷とはこういうものなのだと深く感じた。

## 6. おわりに

小さい頃より転校を繰り返して育った私にとって、伝統的な地域の行事や神事などはこれまで大変縁遠いもののように感じていたが、今回の調査実習で多くのことを西保の皆様から学ばせていただいた。実際に住民同士のあたたかい関係に触れ、私自身も少しながら加わることができ、とても楽しく過ごさせていただいた。

この報告書を作成するに当たってお世話になった西保地区の皆様、とりわけ本調査及び2回にわたる補充調査でお話を聞かせていただいた大沢の方々と上大沢の方々に厚く御礼申し上げます。